

博士学位請求論文審査報告書

学位申請者：山根聡之

論文題目：「統治と信用——ウォルター・バジヨットの思想——」

1. 本論文の主題と構成

本論文の目的は、19世紀イギリスの知識人ウォルター・バジヨット（1826～1877）を思想史上に位置づけることにある。

バジヨットは、ヴィクトリア期のイギリスを代表する知識人だった。その業績は多方面にわたり、これまで政治、金融、経済学上の方法論など理論領域で、それぞれ個別的に研究がおこなわれてきた。書かれた評論相互の関連性やバジヨットの思想の全体像に迫る考察はほとんどなかった、といってよい。本論文は、研究史上のこの偏向を是正したいとする野心的試みであり、バジヨットの仕事を全体として19世紀イギリス・ヴィクトリア朝期の知的環境のなかで論じようとする。

本論文の章別構成は、以下のとおりである（全158ページ）。

第Ⅰ部 序論

序章 本稿の主題・方法・構成	1
第1章 「社会の博物学者」バジヨットの知的背景	24
第2章 カルチュアについての準備的考察	46

第Ⅱ部 本論

第3章 バジヨットの政治思想——『イギリスの国家構造』の分析	70
第4章 バジヨットの経済思想——『ロンバード街』の分析	98
第5章 バジヨットの文明史論——『自然科学と政治学』の分析	120

第Ⅲ部 結論

第6章 バジヨットとイギリス経験科学	144
参考文献	152

2. 各章の概要

本論文によれば、バジヨットに関するこれまでの論考は、以下の2つの理由により、大きく分けて経済思想、政治思想の両分野に分裂していた。

- ① バジヨットが体系性や抽象性をめざすより、具体的現実によりそった時論の形式をとって発表した点。残された評論の多くが雑誌掲載にもとづいており（ただし『ロンバード街』は書き下ろし）、先行研究も個別の問題関心からアプローチされがちだった。
- ② 研究者の専門領域と問題関心が限定されていた点。バジヨットは経済学者や経済評論家の側面ばかりでなく、政治評論をも手がけた。読み手側の専門関心に限定されて、読み手の多くは他領域への注意をあまり払っていない。

バジヨットの著作群がもつ関連性や主張の一貫性について包括的に論じられることは、実際ほとんどなく、政治思想史と経済思想史とのあいだの棲み分けにも似た知的分断があった。バジヨットは、後年「社会の博物学者」とよばれることになるほど多彩な関心を示した。彼の活躍した時期は、アルフレッド・マーシャルが確固たる科学の一部門として経

経済学を確立するよりも前の時代である。バジヨット思想の特徴は、どん欲で幅広い知的態度にあった。それは、学問的禁欲とは対局にあるといってもよい。本論文は、彼の主著 3 作（『イギリスの国家構造』（1867 年）、『ロンバード街』（1873 年）、『自然科学と政治学』（1872 年））が、イギリスにのぞましい社会秩序を模索する立場から書かれ、「諸傾向の科学」を探究する作業であった点で相互に関連していた点を解明しようとした。

第 1 部（序論）は、先行研究の整理と本論文の目的を明らかにする。バジヨット略伝をたどり、政治・経済を中心とする評論活動を本格的に開始するまでに彼が習得した「カルチュア」（教養）の内実を焦点をあてる。

本論文は、晩年のおよそ 10 年間に出版された著作群を検討することから、初期の文芸評論を含め前半生を概観するのは、バジヨットの知的基盤形成を検討することで、のちの仕事の含意を見極めたい意図による（第 1 章）。

本論文では、バジヨット思想を検討するに先立ち、「カルチュア」の意義と用語法について考察する。はじめに「カルチュア」の語源について検証し、マシュー・アーノルドと T.S.エリオットのカルチュア論との比較をこころみる（第 2 章第 1-3 節）。つぎに日本のカルチュア概念について、明治・大正期の日本のカルチュア概念の導入過程を概観する。こうした作業をふまえてバジヨットのカルチュア像を検討し、その独自性を見出そうとする（第 4-5 節）。

第 2 部の本論は、バジヨットの主著について検討する。

まず第 3 章では、政治領域の主著とされる『イギリスの国家構造』（1867 年 以下『国家構造』と略記）を読み解く。『国家構造』は、のちの作品に見られる特徴がいち早くあらわれた重要な著作だった。それは、19 世紀イギリスの統治のしくみと、政治をめぐる支配と被支配の心理をたくみに融合させて論じ、政治指導者にむけて統治の方法を指南するという性格をもっていた。バジヨットが初期論文「議会改革」からひきつづいて関心をよせていた選挙権拡大。第 2 次選挙法改正（1867 年）によって実現したこの出来事を見すえ、安定的統治を維持するための政策的処方箋として発表されたのが『国家構造』だった（第 3 章第 1 節）。

バジヨットは、統治機構を観察するとき、三権分立ではなく、「威厳的部分」と「機能的部分」、つまり象徴的な権威と実効的な権力行使の 2 主体が強く融合する点を強調した。統治機構が「仮装の共和制」の形態を保ちつづける点を指摘したことが、『国家構造』最大の貢献だった、と指摘される。

バジヨットは「カルチュア（教養）をそなえた 1 万人」educated 'ten thousands' という用語を使用する。政治の担い手としての彼らを重視し、選挙権拡大には反対した。それは、新たに有権者となる都市の下層労働者が、政治参加の資格を満たさないからだ。財産も教養もない。新聞も読めない。政治に関する議論をする能力のない者には、政治参加の必要要件が欠けおり、世論を構成できない。選挙権拡大に先立って、まずは初等教育制度の整備が急務であると主張した点を、第 3 節で指摘する。

統治機構の変化は、選挙権拡大だけにとどまらない。議会を構成するメンバーの変質や公務員組織の整備にともなう行政の拡大は、統治する側に業務の変更をもとめた。特徴的なのが、議会や行政のなかで、かならずしも政治的・経営的判断をとまわらない事務仕事が増えたことである。その結果、中央・地方行政は組織化が急速に拡大・進行した。バジヨットはこうした公権力の組織化に懐疑的で、その流れが抑えられないことも理解してい

た。行政業務拡大に関する指摘は従来ほとんど言及されていない。しかしそれは、『ロンバード街』後半の銀行業界や実業界の組織化とかかわる重要な論点とする（第4節）。

第4章は、『ロンバード街』（1873年）を解説する。同書は金融市場を分析した古典的著作である。本論文は、同書がイギリス金融市場の現実的特徴に即しながら理論化した点に注目する。これは方法態度において『国家構造』と一致すると見ている。『ロンバード街』で論じられる市場の成長は、『国家構造』の政治体制の成長とつよく関連づけられているからだった（第4章第1節）。

『ロンバード街』での最大の理論的貢献は、イングランド銀行政策のなかの「バジヨットの原理」である。同書は、同行の政策裁量を論理的に明確化した。バジヨットは、「最後の貸し手」として同行が金融市場に積極的に働きかけ、銀行の取付危機にさいしては、あえて懲罰的なほど「高金利を課して多額に貸し付ける」よう提案した。彼は不確実な信用制度に、安定性の根拠となる担保（準備金および安心感）をおくよう提言したのである。その貢献は金融市場の解明や政策提言の側面だけにとどまらない。敏感な信用制度には迅速な対応が必要という立場から、景気循環の理解がいちはやくおこなわれていることは重要、と指摘される（第2節）。

しかし、本書についてより強調したい、と本論文がいうのは、『国家構造』と『ロンバード街』との構造的な類似性である。『国家構造』のなかでしめされた「威厳的部分」と「機能的部分」。この見方は、『ロンバード街』にも導入されている。両「部分」の指摘は『国家構造』最大の業績であったが、バジヨットは、金融市場を「王制」と「共和制」とになぞらえ、前者を「単一準備制」に、後者を「多数準備制」に対応させる。「取引における信用とは、政治における忠誠のようなもの」との指摘にあるように、バジヨットはイギリス金融市場が、イングランド銀行を頂点とする王制的形態を採用して成立する場所であると見なした。ここではイングランド銀行の管理体制が統治形態の一種として読み替えられ、信用はイングランド銀行の権威によっても担保されるとみなされている（第3節）。

第5章は、『自然科学と政治学』（1872年以下『自然科学』と略記）に注目する。この書が評価されたのはおもに第二次大戦前までで、現在では研究もほとんどないが、本論文は、前2作を理論的に拡張した社会認識の書として重要な含意を認める。

同書で重大なテーマとして扱われたのが「国民性」だった。当時のイギリスでは、いわゆる「政治の科学」や科学としての経済学などを、いかに自然科学のように洗練させ専門性を高めるかというテーマが重視され、バジヨットもその潮流に敏感だった。

『国家構造』の忠誠にせよ、『ロンバード街』の信用にせよ、バジヨットの関心は一貫して「統治」にあった。社会の支配と被支配のしくみや、社会制度の成立プロセスをおもに信頼などの社会心理的あるいは社会倫理的な要因にもとめた点が彼の方法上の特徴だった。イギリスの統治機構と金融市場が、『自然科学』ではイギリス社会の成立という思考の枠組みへと拡張される。そして、一般的な問題関心として読み替えられた点は重要、と本論文は指摘する。「統治」と「信用」という2つの枢要な社会の柱を分析した後に、さらに独自の文明社会論の構築を旨としたのが『自然科学』だった、と説かれる（第5章第1-2節）。

『自然科学』は、副題に「政治社会にたいする自然選択と遺伝の法則の適用にかんする諸考察」とある。政治社会の起源、人類未開状態からの進歩過程を考察するため、当時最新の人類学や生理学等の成果が取り入れられた。その目的は、イギリス人の「国民性」を解明することだった。社会統治の資質だけが大切なのではない。統治される側にも、政治

判断をおこなう「世論」を構成しうる資格要件がもとめられる、とバジヨットは説いた。彼が理想とする「国民性」とは、政治社会の担い手となる世論を構成するための「議論」の資質だった。

『自然科学』では、社会の文明化プロセスが、初期の準備時代から3つに時代区分される。(1)「模倣」、(2)「戦争」、(3)「議論」。各時代はさまざまな「偶然の優位」に左右される。『ロンバード街』でいえば、「偶然の優位」から設立されたイングランド銀行は、最初は私的な預金銀行業から出発したが、やがて別の機能がもとめられた。その機能を後から獲得することで、政府の銀行という新しい個体へと成長した、と解釈された。それは自然選択と遺伝の原理を、自然界を克服して発展した文明社会へと当てはめる初めての試論となった。

『自然科学』は、当時の「科学」的な成果をいち早く取り入れた。もっとも強い影響を与えたのが、H.T.バックル『イングランド文明史』(1857-61)である。本論文では、バックルが提唱した「諸傾向の法則」なる方法概念に、バジヨットが強い関心をもっていたことを指摘している。『イングランド文明史』がもたらした「諸傾向の法則」という発想は、J.S.ミルが提唱する「統治形態の傾向に対する問題」(統治の問題は普遍的ではなく、特定の国民性や時代に関わるという問題)とともに、バジヨットが模索する「諸傾向の科学」への道筋をつくった、と解釈する。バジヨットにとって自然科学とは、バックルを祖とする「自然についての科学的・合理的思考」を意味した。それは、自然科学一般や物理学をさしていなかった。

バジヨットはイギリスの政治社会(金融市場をふくむ)を抽象的システムではなく、「偶然の優位」から出発した歴史的現実の累積過程として理解した。『自然科学』は、特定の時代と社会にあてはまる「諸傾向の科学」の構築を追求する作業だったが、そうした意図にもとづく具体的・歴史的なケース・スタディとして発表されたのが『国家構造』、『ロンバード街』だった。バジヨットが思い描いた「諸傾向の科学」とは、具体的な歴史的現実をその構造的要因までさかのぼって観察分析する「科学」だった、と本論文は結論的に推定する(第5節)。

第6章は、この論文を総括し、バジヨットが最晩年に行った一連の「経済学研究」について部分的に論じる。バジヨットは生涯をつうじて政治や金融の場における「信用」や、「支配」または「統治」のしくみを解明することをめざした。統治機構であれ金融市場であれ、いまある組織や制度をいかに運営するべきかという経験的かつ合理的な観点から出発するのが、彼が提唱する「実業の科学」だった。

彼にとっては議会政治も公務員組織も銀行業務もすべてが実業であり、世の中にある政治的な仕事(political business)にふくまれた。『国家構造』の用語法に即せば、政治社会の本体である「機能的部分」とは、組織の管理運営(administration)やマネジメント、調整といった仕事を意味すると見なせるのだった。「実業の科学」とは仕事をつうじた日常経験のなかでの合理主義、すなわち経験的合理主義の追求を意味した。それは中産階級の自尊心に根ざしたものだ。こうした中産階級によるガバナンス論は『国家構造』『ロンバード街』の官僚制批判の根拠となっており、のちのマーシャルの「経済騎士道」と共鳴する。

バジヨットが制度分析をおこなう際、つねに「機能的部分」の観点から対象を理解する

姿勢が徹底していた。こうした見方は、経験の中から理にかなったものを引き出すというイギリス流の経験科学的な発想にもとづいていた。バジヨットにとって経験科学的に認識されないものは意味がなく、自分がイメージする「諸傾向の科学」には当てはまらなかった。彼が理想としたのは、「いきいきとした穏健」資質をもつ者たちが「議論による統治」をおこなう社会だった。ただ、その担い手は「議論」する能力をもった「世論」を構成できる「カルチュアをそなえた1万人」にかぎられた（第6章第1節）。

本論文は、最後で未完作『経済学研究』を分析、特に論文「イギリス経済学の基本原則」を取り上げる。バジヨットは「諸傾向の科学」とともに「歴史と経済学との調和」を提唱し、これが彼にとって『自然科学』で得た成果と経済学との調和をめざす作業でもあった、と指摘される。この方法論上の整理作業は、経済理論の領域ではイギリス歴史派経済学の立場とも共通する関心をもち、やがてマーシャルやジョン・ネヴィル・ケインズにひきつがれ、洗練されていく、と展望する。

おわりに、本論文で残された研究課題について要約する。本論文では、初期の文芸評論についてはほとんどふれられない。文芸評論は30代半ばまでに限られる。登場人物の成長や作者の人格につよい関心がむけられている点、支配や信用といった彼の社会心理的あるいは社会倫理的な手法にひきつがれる点を、特徴として指摘する。

3. 本論文の審査

本論文は、2013年11月に提出された。その後2014年2月に口頭試問を行い、審査員から疑問点や問題点の指摘がなされた。その主要な論点は以下のとおりだった。

第2章のカルチュア論の意味と位置づけが理解しづらい。力が込められて書かれているがもう少し詳細に論じた方がよい。制度と権威・権力との関係についても同様。政治学と経済学について、同時代の状況を、より広い文脈で展望した方がよい。実際の金融業の発展（金融業の合併など）への顧慮が足りない。金融について、イングランド銀行に先行するアムステルダム銀行など、中央銀行一般についてもっと顧慮すべきだ。実際のところ、バジヨットはどう見ていたのか。東インド会社についてバジヨットはどう言及しているか。補足してもらいたい。「諸傾向の科学」の詳しい説明がほしい。マーシャルやフェビアン協会への言及とバジヨットへの影響を論証した方がよい。景気循環発見の先駆性についてもっと論じるべきである。ジェヴォンズやジュグラールとの関係を論じてもらいたい。

審査員からの質問と要望は、本論文のいわば脇を固める作業の要請だったとはいえ、同時代の思想状況においてバジヨット論を志向する本論文の場合、いずれも肝要な論点を構成する。その後、申請者は指摘された観点に沿って執筆にいそしむことになったが、申請者の身辺状況の変化により加筆が遅れた。補訂版が提出されたのは、2016年6月になってからだった。この時点で直ちに審査員一同が論点のチェックを行い、要望が満たされていることが確認された。

4. 本論文の評価

本論文は、経済の観点が欠けた政治領域の諸研究と、政治の観点が欠けた経済領域での研究蓄積を脇に見ながら、バジヨットの業績を統合的視点から捉え直そうとした。その努力は多大なものがあり、また目論見は、審査者の指摘をクリアしたことで概ね成功した、と言ってよい。

もとより、バジョットの著述を丹念に読み込む作業を中心課題としていることから、現実の「中央銀行」の歴史的現実に切り込む論点などでは脆弱との印象が残る。ただ、『ロンバード街』後半の、イギリスの金融機関と組織の解説は、従来ほとんどふれられることがなかったので、学界への一定の貢献があると評せよう。

『ロンバード街』と『国家構造』に加えて『自然科学』をも統合的に考察したことは、この後のイギリス思想研究にとって大きな貢献となった。それは、経済思想、政治思想ばかりでなく、当時興隆していた自然科学的思考のあり方と、社会科学の行方を見通す上でも有益なマイルストーンとなるだろう。

ただ、本論文が対象としたのはバジョットの若き日の成長過程と晩年 10 年に限られている。バジョットの思想が確立した時期の考察に集中させたからであり、諸著作間の構造的連関を明らかにして、当時の思想状況に位置付けるという課題からだったが、以下の点でなお立ち入って論じる必要があったのでは、との声もあった。

①初期の著述との関係性を、より詳細に明らかにすべきではないか。②同時代の思想家との交流の様態、特に経済学者（J.S.ミルやジェヴォンズ、イギリス歴史派経済学等）や歴史学者、社会学者との交流、また著作間の影響の存否についてさらに分析する余地はあったのではないか。③『自然科学』までを視野に収めて分析したのだから、同時代の科学者との知的交流の側面にも、もっと分析の目を広げた方がよい。等。

しかし、以上の諸点は、いささか望蜀の感を禁じ得ず、本論文の価値をいささかも貶めるものではない。それらは、むしろ今後の学会を通じての課題とすべき事柄であろう。申請者も、これらの点については十分に課題認識しているので、今後の活躍を期待したい。

以上のことから、審査員一同は、本論文の執筆者、山根聡之氏に一橋大学博士（経済学）の学位を授与することが適当であると判断する。

2016 年 9 月 10 日

審査員（50 音順）
（委員長）大月康弘
北村行伸
城山智子
西沢 保
山崎耕一